The Best Paper City
感謝、そして未来へ

「日本一の紙のまち」四国中央市
市政20周年発足記念事業ブランディング

企画にあたって私たちが特に考えたのは、
「どんなビジュアルであれば、このまちの人（一部の人ではなく、できるだけ全ての人）が
四国中央市に対して誇りを感じ、胸を熱くし、他者に自慢したくなるか」ということでした。
20周年事業という単なるお祭りのビジュアルと捉えず、
このまちを未来へ突き動かす起爆剤のようなものにしたい――
四国中央市に住む私たちだからこその目線で、記念すべき1年を象徴する企画を行いました。

PROJECT STORY これは、「紙のまち」だからうまれた物語。

江戸時代から盛んだった製紙業。
戦禍やオイルショックにより衰退した地域も多い一方、
四国中央市（宇摩地方）の紙産業は発展しつづけました。
そこには先人の熱い思いや、情熱的な手しごと、
休むことなく稼働し続ける製紙機の熱気、
さらには、そこに生じた環境問題に対しても
真摯に向き合い改善を果たしたひたむきな姿勢が
確かにあったことと思います。

その熱量をビジュアルにするため、
「四国中央市でしかできない表現」を、
「今のこの瞬間でしか捉えられない表情」で
切り取ることに徹底的にこだわりました。

被写体は、紙のドレスをまとった「紙の女神」。
ドレスは、市内企業からお預かりした市内産の紙を使って
四国中央市出身の切り絵作家が制作しました。
極寒の早朝、四国中央市を一望できる高台で切り取った一瞬。
写真に映っていない、言葉で表していないその裏側にまで、
このまちだからうまれた物語が詰まっています。

CREATIVE 1年間、このまちを彩った「紙の女神」。

当初思い描いていたように、
「このまちの人（一部の人ではなく、できるだけ全ての人）」は、
ポスターや新聞や市報に掲載されたビジュアルを見て、
嬉しく思ったり、ふるさとを見直したり、
胸を熱くしたり、誰かに自慢したりしてくれたでしょうか。
そんな方が、少しでもいたのならば最高だなと思います。